動詞について ⑰

天理大学非常勤講師
深谷　耕治　*Koji Fukaya*

前回、前々回と「たすかる」と「たすける」について見てきたが、「たすける」の場合、その連用形名詞である「たすけ」が頻出する。そこで、今回は、限られた範囲ではあるが、「たすけ」とそれをめぐる動詞について見ていきたい。

「たすけ」には、まず、多くの場合「（を）する」という動詞がついている（三号98、七号28、83、84、85、101、八号28、30、九号6、7、9、29、十一号31、十二号93、94、130、十三号38）。また、「いそぐ」や「せく」という動詞も多い（一号8、三号104、四号78、七号47、十号15、十三号112、116）。「このたすけをどういうことに思っているのか」と人間に問いかけるかたちで、「おもう」が接続することも多い（二号10、七号98、八号31、十一号16、十二号95、十七号51、52、53）。その他、「かかる」（三号44、八号69）、「うけあう」（八号45、48、十五号55）、「おしえる」（四号56、57、九号34、十一号52、十二号137）、あるいは「とめる」（三号78、六号114）や「しる」（六号107）などが使われている。

それでは、それぞれ文脈に即して見ていきたい。

どのよふなたすけするのもみなつとめ
月日ゆうよにたしかするなら　（七号83）
しんぢつの心あるなら月日にも
しかとうけやいたすけするぞや　（七号84）
このたびハたすけするのもしんぢつに
うけよてたすけいまがはじめや　（七号85）

この箇所では、「たすけする」という語が頻出する。83の下の句で「たしかするなら」と言われている「する」は、上の句の「たすけ」と「つとめ」の二つが掛かっている。つまり、「たすける」を「たすけ」と名詞化して「する」と接続することで、「する」という動詞を通して「つとめ」という名詞と「たすけ」とが意味の上で関連づけられていると解される。和歌のリズムの上からいえば、「つとめ」と「たすけ」は共に三語なので、音韻上も交換しやすい。また、83では、上の二句目が「たすけ」、下の二句目が「たしか」で、T音で響き合っている。さらに、ここでは「たすけ」に「する」が繰り返し接続していることから、85の下の句の「たすけ」は一語ではあるが、「たすけする」という意味合いが含みとして持たされている。

「たすけ」と「する」に関して、もう一例見てみよう。

このさきハせかいぢううハ一れつに
よろづたがいにたすけするなら　（十二号93）
月日にもその心をばうけとりて
どんなたすけもするとをもゑよ　（十二号94）
このたすけどふゆう事にをもうかな
ほふそせんよにたしかうけやう　（十二号95）
またゝすけりうけ一れつどこまでも
いつもほふさくをしゑたいから　（十二号96）

この箇所の前段で「人をたすける心」になるように促されており、それから世界中の人間が互いに「たすけ」を「する」なら（93）、月日もその「人をたすける心」を受け取って、どんな「たすけ」も「する」と歌われている（94）。そして、続く二首で、その「たすけ」の具体例として、当時恐れられていた「疱瘡」に罹らないことや、生活に切迫した事柄である「豊作」を与えることが挙げられている。

次に、「たすけ」を「いそぐ」や「せく」という場合に関して、一例を見てみよう。

むねあしくこれをやまいとをもうなよ
神のせきこみつかゑたるゆへ　（三号103）
たん／＼と神の心とゆうものわ
ふしぎあらハしたすけせきこむ　（三号104）

ここでは、103で「胸が悪い」という状態に対して、世間一般的な「病」と捉えるのではなく、それは「神の急き込みがつかえたからである」と諭して、そうして急く気持ちは何を急いでいるかというと、104で「たすけ」であると明かしている。104では「ふしぎ」「現し」、「たすけ」「急き込む」と、「名詞＋動詞」がリズムよく歌われて、「ふしぎ」と「たすけ」が関連づけられている。

「おもう」と接続する「たすけ」に関しては、例えば、十七号では、49・50で「世界中の人間が可愛いゆえから、その胸の内を掃除したい」と述べて次のように歌われている。

このそふぢどふゆう事にをもている
たすけばかりをふもているから　（十七号51）
たすけでもあしきなをするまてやない
めづらしたすけをもているから　（十七号52）
このたすけどふゆう事にをもうかな
やますしなすによハりなきよに　（十七号53）

51で、「思っている」という言葉を通して「たすけ」と「そふぢ」が対比的に歌われている。そして、52でその「たすけ」というのが、「悪しきを治す」ことだけでない、「めづらし」「たすけ」であると説かれて、53では、「どういう事に思うかな」と人間に問いかけられた上で、「めづらし」の内実が「病まない」「死なない」「弱らない」ものであると述べられている。「たすけ」をめぐって、51・52の「思う」は説話者（親神）からの「思う」であったが、53では人間の「思う」に転換している。

その他の動詞で、例えば「おしえる」ということに関しては四号で次のように述べられている。

このさきハせかいぢううを一れつに
たすけしゆごふをみなをしゑるで　（四号56）
だん／＼とよろづたすけをみなをしへ
からとにほんをわけるばかりや　（四号57）

56で「たすけ」に「守護」が後置し、57では「よろづ」が前置している。「たすけ＋おしえる」という基本構造に、それぞれの言葉が付加的に修飾されているといえよう。「おふでさき」はこうして基本線を取りながら、意味を重層的に伝えていくことが特徴的であるといえる。

最後に、「うけやう」も見ておこう。次の歌では、「心」を「受け取れば」、「たすけ」を「請けあう」と「心」と「たすけ」が対比的に述べられている。

心さい月日しんぢつうけとれば
どんなたすけもみなうけやうで　（八号45）